

## 豆

川柳 創駄郎

編集委員の皆さん、毎月ご苦勞様です。川柳も三年前編集委員の一員として籍を置きました。たいした協力も出来ませんでした。が、会報の「編集後記」は必ず書き、決められた月に提出するよう言われ、大変苦勞した記憶があります。その影響かも知れませんが、多少ですが筆無精が解消されたと思います。今では書きたいときに書き、原稿を提出することと拙(つたな)い文章でも全国版(菱の実会日より)に載せてもらえることはありがたいことです。

さて話は変わりますが、「大岡政談」という落語を御存知でしょうか。奈良市内で、老夫婦が営む豆腐屋の店先に、早朝一頭の鹿が死んでいました。さあ大変です。神の使いとして知られる鹿が、店先で死んでいるのですから。捕えられ取り調べ結果は、大岡越前守忠相の公平なる大岡裁きで無罪放免となり、最後に、豆腐屋、これからも「まめに暮らせよ」。これにて一件落着きという落語です。筆無精の漢字は前から知っていたと思います。が、反対語の(筆まめ)の漢字はと思ひ、辞書で(筆忠実↓ふでまめ)と知りました。(忠実↓ちゅうじつ) ↓①まごころを尽くしてよく努めること。②実際の通り正確に行うこと。(忠実↓まめ) ↓①まじめ。誠実。本気。②労苦をいとわず勤め働くこと。「・・・に働く」③生活に役立つ。④身体の丈夫なこと。達者。息災。「・・・で暮らす」。(ちゅうじつ) (まめ)と読んだとき、だいぶ意味が違うようです。④の「・・・で暮らす」を見た時、大岡裁きで(まめに暮らせよ)の中に(忠実↓まめ)も含んで落語の落しにな

っていると思うようになりました。どうでしょう。か。日本語は読み方を変えると面白い。工夫(くふう)が工夫(こうふ)に早変わり。大家(おおや) ↓貸家の持ち主。家主。(たいか) ↓大きな家。貴い家柄。その道に特に優れた人。(たいけ) ↓金持ちの家。社会的な地位。由緒ある家柄。

ここで日本語について話を進めたいと思います。外国人が日本語を習うとき大変だとよく聞きます。漢字・かな(片仮名、平仮名)カタカナ語(外来語)そしてローマ字等、多岐に習うことが多いことです。漢字は古代中国に発生した文字。現在中国、日本、朝鮮で使用。紀元前十数世紀の殷(いん)の時代にすでに用いられた。日本では一般に「峠」「榊」「辻」のいわゆる国字を含めて漢字と称する。日本へは一世紀ごろ伝来。国字↓日本で作られた漢字。又訓読みで音読みがないのが普通です。国字をいくつかあげてみましょう。峠(とうげ)、鞋(こはぜ)袴(かみしも)と面白いですね。(橋、鱈、鱧) そりと読みますが、橋(せい、さい、そり) ↓中国で泥の上を行くのに用いた乗り物。現在では雪や氷の上をすべらせて物を運ぶ乗り物。鱈はなんと美しい国字ですね。鱧も美しいです。例外もあります。働(どう、はたらく)は人が動いて働くの意味を表わす。動が伝来して人偏をつけて国字にした。中国でも使われたことがあるそうです。かな(片仮名、平仮名)の「片」は一部分の意。阿(ア)伊(イ)宇(ウ)久(ク)己(コ)のように漢字の一部を取って作ったのが片仮名です。平仮名は漢字の草書体から作られた草(その)の仮名をさらにくずして作った文字。安(あ)以(い)宇(う)衣(え)等。片仮名も平仮名も平安初期に発生した日本の仮名文字です。

日本語は「。」と「。」とは大違い。男(パパ)が女(ママ)に早変わり。バスに乗るのをパスして少し歩いてみようか。 ↓ウオーキング。保存食用にかんぱん(乾パン)有り、かんぱん(看板)が店にでていた。熟語に一字付けたことよって違った読み方に変化するものもあります。

五月(ごがつ)・・・五月雨(さみだれ)。(五月雨をあつめて早し最上川) ↓奥の細道より。五月蠅(うるさい)。(やれうつな蠅が手をすり足をすり) ↓一茶の句より。五月晴(さつきばれ) 大空に元気に泳ぐ鯉のぼり五月節句の五月晴れ) 日本語はひらがなだけではわからない。漢字にすれば意味が通ずる。

「きりはきりをとおして きりをとおさず」(桐は錐を通して霧を通さず)。錐↓穴をあける工具。桐は御存知の通り琴、タンス、家具材、下駄、箱などに利用。吸湿性も少ないので、タンスは霧(湿気)を通さず最適と言われている。

日本語は、いろいろ大変ですが、面白いですね。ここでなぞがけを一つ。新聞とかけお坊さんと解く。「今朝(袈裟) きて今日(経) 読む」 ↓新聞のコラム欄より。落語も、なぞかけも、日本語が生んだ芸だと思ひます。

何だ、「豆」だけの話しだけと思つたら、ごたごた、いっぱい枝が生えて文章が長いぞ。

すみません。どこで止めていいのか分からなくなりました。しかし「豆」だけに、いっぱい枝が生えて(モヤシ)になったのだ。

今日もまた 辞書をひきひき 日が暮れる。